

◆第2話◆ ものづくり——活版と写植

「ものづくり」は、我が国の根幹ともいわれる。人件費の高騰が都市圏から地方へ流出という現象を招き、ドーナツ化と言われた。そして、大事な生産拠点は、東アジアへと、東南アジア諸国へと移って久しい。

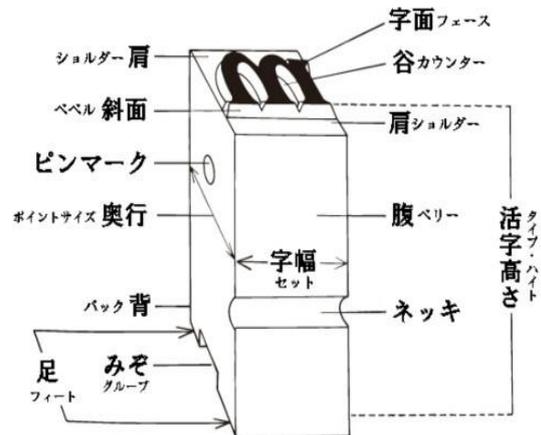
では、本づくりは、どうなのか。組版作業は、かつて近隣国（筆者の経験は、大韓民国）で行われたことがある。もちろん、この時点では、活版印刷である。印刷会社は、移送中に原稿が損傷を受けた時の対策として、全原稿の複写（複本）を残して大韓民国にある企業に製作手配をした。ここで、何が起きたかということと原稿の漢字が新字体であるのに組み上がってみたら旧字になっていたということである。悉く旧字（正字）になったのは、現場作業員

の受けた教育の賜物といえる。また、教えをしっかりと身に着けた証しでもある。外注仕事だったことで、我が方の校正部に校正依頼する前にゲラ（校正刷り）を見ることができ、組み直ししてもらったことを思い出す。約 300 頁の書籍だったので、組み直しは、キツイ仕事になったことは想像に難くない。1 字 1 字突き合わせてはいないが、間違いはほとんどなかったと記憶している。

前回も書いた。活版は、鉛公害の関係から活字の使用が不可能になって、出版界は、写真植字（特に写研文字）オフセット印刷へと移行し始める。電算写植の萌芽はあるものの手動写植機が主流である。写植オペレーターの技術習熟度に差があるものの、初校が原稿と大きく食い違った仕上がりになった記憶が多くない。「手動式」ということは、原稿修正の対応が切り貼りによることを意味する。ということ、版下（活版でいうゲラ）の直し作業は、たいへん時間のかかる作業になることを意味している。まさに文字送りや行送りになる手直しは、もってのほかである。いわゆる後から手直しが発生しない「完全原稿」での脱稿が期待されたのである。

活版印刷では、特にレイアウト用紙を必要としないところまで練れていたものが、写植になってかなりしっかりと割り付けを必要とした。時間生産性としては、かなり低下を余儀なくされた。ここでも、技術革新の進歩は、目覚ましく瞬く間にコンプシートは隅に追いやられることとなった。電算写植及び電子組版システムの躍進である。電算写植に比べて電子組版システムはオフィスコンピュータ仕様なので特別な電算室を必要とせず、中小印刷業者の支援をする役目を負った。この隙にデザインの能力の高さ、ヴィジュアルデザインのた易さを売り物にシェア獲得したのは、「クオーク」システムを持つアップル社（Apple）の Macintosh であった。

電算（電子）化された組版作業は、ワードプロセッサやパソコンのワープロソフトを操作するように手直しがた易くなったと多くの人たちが考えるように



なった。工場の現場もこれまでの活版や手動写植に比べて格段に生産性が上がり、時間工数から見て、版の直しに手間がかからないように周りから見られるようになった。経費計算上、直し経費は発生している。見積りに反映させることが難しくなった。また、ワードプロセッサやパソコンソフトの普及は、原稿執筆にも変化をもたらし、データによる原稿渡しが一般的になった。これにより、製作者（出版社、印刷会社）は、省力化が図られたことになっている。ただし、データは、常に完成度が高いとは限らない。

大手印刷会社は、自社の持つ活字パターンを電算写植に移設するための投資が避けられなかった。もちろん、活字メーカーのイワタやモトヤも同様にデジタルフォントを提供して、電算（電子）化は、大いに進展した。

同時に、DTP（Desktop Publishing）は、上記の電算（電子組版）システムの仕様であるが、少ロット印刷の代名詞としても使われるようになった。このことは、デジタル印刷の普及を加速させ、ダイレクト印刷の衰退へとつながる。

現代は、活版の「目に優しい」印刷物から多様の印刷物の時代真っ盛りである。

しかし、本づくりの基本及び原則は、変わっていない。本は、原稿（紙ベースの指示・指定書）を脱稿しなければ、印刷作業現場は右往左往するばかりである。